

きもそうで、淡々とした調子のなかに感懐を吐露し、自然の興趣にひたり、わが身の現状に感謝している。毎日の札仏のせいであろうか。老荘の影響であろうか。この心境は、一直線に深まらず、この後も時として激し、恨むが、それは罪名の忌わしただけからでも当然であろう。一進一退ではあるが、漸次に、そして確実に鎮静に向かいつつある。(下略)

(三)小島憲之・山本登朗氏(日本漢詩人選集Ⅰ『菅原道真』「51官舎幽趣」一六五頁及び「45不出門」一四四頁)

この一首、謫居であるみすばらしい官舎での苦しい生活を幽閑な隠士の暮らしに見立て、その境遇に満足しようとする作者のころを述べる。その境地は「45不出門」等にも近い。

〔「45不出門」の注釈の箇所では以下のような一文が載る。〕【筆者注】

(太宰府の謫居での苦しい暮らしの中で、ある月の十五夜に、道真はこのような、ある種の静かな心境に至り、それを「白詩」の「不出門」という詩題やその詩の姿勢を借りて表現しようとしたものと考えられる。この詩にただ道真の怒りや怨恨だけを読み取ろうとするのは、後世の道真怨霊伝説などによる誤読であろう。配所の道真にも、苦悩の中に、時として平穏な自足の時間があった。道真は自分を白居易になぞらえ、白居易に倣うことよって謫居の苦しみに耐えようと試みていたように思われる。)

筆者は、この詩情をよみ解く鍵が、とりわけ五句目の「此時傲吏思莊叟」十二句目の「優於誼舎在長沙」の解釈にあると考える。

以下、その考察の前に、前回に引き続いて本稿ではこの「504官舎幽趣」の注釈を試みたい。注釈を進める上で<sup>(1)</sup>の凡例は前稿のそれに倣う。<sup>(2)</sup>